# ジョーカー

無六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ジョーカー

【Ｎコード】
Ｎ４３１２Ｅ

【作者名】
無六

【あらすじ】
１年前兄が急に消息をたったその時期と重なりとある学校で５１人もの生徒がいなくなる。それは後に『神隠し』と言われるようになりそして１年後また神隠しが起き巻き込まれる雅人達であった・・・

**とある通学路での事**

「ねぇ、知ってる？」

通学路を歩いている女子学生が隣の男子生徒に話しかけた

「何がだよ」

「うち学校の生徒が５１人消えたって話」

「・・・ああ、その話か」

「なんだ、知ってたの？」

少し残念そうにする女子学生

「いくら鈍い俺でもニュースでも流れればそりゃあわかるさ」

「ふぅん」

「な、なんだよ」

「なんでもないわ」

そう言ったっきり女子学生は黙ってしまった。

隣に歩いている男子生徒はある場所に目をやり

鞄から何かを取り出しその場所につくとその何かを投げ捨てた

「今何を捨てたの？」

「ただのトランプさ」

「腕(うで)時計も一緒にあった様な気がしたけど」

とゴミ捨て場の方にちらりと目をやりながら言う彼女

「あの腕時計も寿命だから新しいの買おうと思って」

「今日の放課後一緒に買いにいったげよっか？」

「ああ、いいよ」

「じゃあ決定！終わったらいつものところでね」

校舎の方へ走り去る途中こちらを向き

鞄を持った右手の方で手を振った

男子生徒もそれに答えて手を振る

しばらくして彼女の姿が見えなくなり

「一緒に買いにいこ・・か・・・」

と、呟きその場を後にしていた

でも忘れはしないだろう

５１人を犠牲にして生き残った

あの日の出来事を・・・

ーーーーーーあとがき

約１年前にも投稿したことがあるんですが

想像力に文才がついてこなくて断念してしまいました

まさか今回もあったりなかったりするような・・・ｗ

ファンタジー系のを１作書いてるですけど途中ですしね３話くらいで

色々悩みあるんですけど小説は大好きです

他の皆さんのも見てます。いずれは読むのも書くのも楽しめるよう

になりたいな～

## 始まり　（前編）

今から1年前

実の兄が消息をたった

当時は家出とかなんとか言われてたけど

その時期と重なっていた事件があった

とある学校で５１人が丸々いなくなるという謎現象

今で言う『神隠し（かみかく）』である

ひょっとしたら兄は神隠しに巻き込まれたんじゃないのだろうか・・・？

「・・い・・雅人(まさと)」

意識の遠いところで自分を呼ぶ声がする・・・

気のせいだろうとまた眠りにつこうとすると

「おーい、雅人・・・ってやっと起きたか」

まだぼんやりとする目をこすりながら声の主の方を向く

「まったく、お前は何度呼びかけたら起きるんだ？」

と、親友である孝司(こうじ)が苦笑いしながらそう聞いてきた

「さぁね、図書室の冷房が効きすぎで冬眠してたからな」

「お前は熊か」

答える冗談にすぐさま返すあたりはさすがである

「で、なにか用事でも？」

「葉子（ようこ）ちゃんがお前を起こしてきてあげてってさ。お前の事心配なんだよ」

「葉子が？あいつも心配性だな、俺は大丈夫だって言っておいてくれ」

するとニヤニヤと笑っている孝司

「な、なんだよ・・・」

「いや、なぁにさすがは幼馴染（おさなじみ）。言うことも分かってるって思ってさ」

孝司はなにやらズボンのポケットから折りたたんだ紙を取り出した

「どうせ雅人のことだから出席日数だけとってたらいいと思ってるんでしょうね。
だけどそれは大間違い。遊べる貯金は最初だけで後になって一気に来るから、
今のうちにちゃんと出ておいた方がいいから来るように。葉子より」

そう読み終えてからこっちに紙を渡してくる

「だってさ、素直に来た方がお前のためだ」

「というか変な女言葉で読むなよな」

紙を受け取り席を立つ雅人

「葉子ちゃんの気持ちを代弁したまでだ、それとも俺の愛が溢(あふ)れた台詞の方がよかったか」

「丁重にお断りするよ」

「へいへい、嬉しい事で」

「きゃっ！？」

っと叫び声がすると共にドドドドっと本が落ちる音がした

音がした方に行ってみると見事に散乱した本と女性徒がいる

「あいたたた・・・」

「忍(しのぶ)ちゃん相変わらずだなぁ」

「大丈夫か景山(かげやま)さん」

返事がないので心配して近づいていくと

彼女もやっとこちらに気づく

そういえば彼女は耳が不自由なのを忘れていた

孝司が手を出して起こす

「あ、ありがとうございます」

「大変そうだね、手伝おうか？」

「・・・あ、いえ大丈夫です」

少し遅れて返事が来るのは唇(くちびる)の動きを読んでいるせいだろう

「ちょうど暇人がいるんだし手伝うよ。お前も手伝うよなぁ雅人(まさと)？」

俺の方をちらりと横目にしながら彼女に唇の動きが見えるように言う孝司(こうじ)

（いや本当にこういうやり取りにかけては俺以上だなまったく・・・）

## 始まり　（前編）（後書き）

キャラ崩壊しそうでガクガクしながら書いている作者であります w
前は久々すぎて後書きという場所があるのを忘れて本編に書いてしまうという結果に・・・（グフ

## 始まり　（後編）

「よし、あらかた終わったかな」

雅人(まさと)は脚立(きゃたつ)から飛び降りる

あれだけ散らばっていた本はすでに元の位置にもどっており

3人でやったので結構早く終わったのである

「本当にありがとうございます先輩方(せんぱいがた)」

ペコペコと頭を下げながらいう後輩(こうはい)

「そんなに感謝しなくてもちょうど暇だったしいいよ」

横目でジロリと孝司(こうじ)を睨(にら)みながらいってやるがコイツには効果がなかった

「そうそう、困った時はお互い様だって・・・ってそれ何持ってるんだい忍(しのぶ)ちゃん？」

孝司がそう聞くので彼女の方を見てみると
その手にはケースと黒色の腕(うで)時計を持っていた。

「え？これですか？さっき本を片付けている時見つけたんですよ。
それになんだかケースを開かないようにする為に腕時計で固定して
いるようですね・・・んっと」

腕時計を外すのに少し戸惑っていた

「景山(かげやま)さんちょっと貸してみて」

腕時計とケースを渡してもらうと確かに少し硬(かた)かったけど何とか外
れた

とりあえず時計は景山さんに預けてケース開けてみると、
ＪＯＫＥＲ(ジョーカー)の絵が描かれたカードがある

その後何枚かペラペラッと捲ってみる

「中身は・・・トランプ・・・みたいだな」

「本当だな、誰か遊びに来たやつが置き忘れてたのかもな」

とケースの中にカードを戻すと1番上のＪＯＫＥＲの絵がさっきと

微妙に（微妙）違う気がする・・・気のせいだろうか

そう考えていると

孝司は俺からトランプの入ったケースをヒョイっととって

「忍ちゃんこれもらってもいいかな？落し物を拾った1割報酬って事で」

「ダメですよ！」

といって孝司からケースを奪(うば)いながら少し怒ったような感じで

「落(おと)し物は落し物です。持ち主が出るまで私が預かっておきますから。

それとこれだと1割ではなく5割になっちゃいますから気をつけてください」

「いやぁ忍ちゃんにまいったなぁ」

笑って応(こた)える孝司(こうじ)

すると昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴ったようだ

「おっと予鈴(よれい)か、じゃあまたね景山(かげやま)さん」

「はい、また昼寝(ひるね)でもしに来て下さいね」

（はは・・・バレてたか）

孝司も挨拶(あいさつ)をかわして図書室をあとにした

先輩達を見送った後、トランプと腕時計を机の上に置いてある

『忘れ物』と書いた箱に入れようとすると

ケースを手が滑(すべ)って落としてしまい、ケースの中身がバラけてしまう

慌てて拾い直しケースに戻して箱に置きなおした
表と裏がグチャグチャになってしまったけど、さすがに時間があまりないので
私は放課後に後回しすることにして
急いで図書室を出て鍵を閉めてその場を離れていった

ピピッピピッ、ピピッピピッ

ピピッピピッ、ピピッピピッ

どこかで電子アラームの音が鳴っている

もしも、今去っていった忍の『耳が聞こえてたなら』気づいていただろう。
図書室からその音が鳴っていることに
そして更にもう少し時間があれば『ある存在』に気づいただろう。

机の隙間（すきま）に入り込んでしまった、

今は何も『描かれて』いない1枚のカードの存在に・・・

## 始まり　（後編）（後書き）

今回も読んでくださった方ありがとうございます
感想もくださった方もありがとうでした
作者としては嬉しい限りです

実はですねこの話は昨日にできてたんですが
文字がおかしな所とか何回か書き直してます（笑
ストーリーも大体できてるんですが
今回の1枚のカードみたいに抜け落ちているところ
とかでてくるかもしれませんw
文才とか考えてまた挫折しないように頑張ります
さてさて今後もよろしくお願いします～

## 鈍い奴

「ぎりぎり授業には間に合いそうだな」

「授業には間に合ったけど、この後葉子(ようこ)ちゃんの機嫌を損(そこ)ねないように
気をつけろよ。彼女怒るととてつもなく怖いからな」

「どうしてだよ？」

「実はな・・・授業を出るように呼びに行ったんだが。こうも言われたんだ」

孝司(こうじ)は眉(まゆ)をグッと吊り上げて

「雅人(まさと)に話があるからなるべく早く連れて来てね
遅れたらどうなるか・・・孝司くん分かるわよねぇ？」

変な声と気持ち悪さを除(のぞ)けば仕草(しぐさ)は葉子に似てなくもない
もしこんな所を葉子に見られたらどうなるかわかったもんじゃない
もちろん孝司のみ話だが。

「早く連れてきてねって言う割にはさっきは暇人とか言って引き止めなかったか？」

「あれはだな忍(しのぶ)ちゃんが1人で片付けると大変だろうと思って引き止めたんだ」

「まぁ怒られるのは孝司だし俺には関係ないけどな」

「っとそれはどうかな？じゃあ俺はこの辺で」

孝司は俺の後ろの方を気にしながらそう言ってさっさと自分のクラスの教室に入っていった

自分も教室に入り自分の席に座わった。

昼休みを終わりを告げるチャイムが鳴り午後の授業が始まった

そしてちらりと葉子のいる方を見ると黒板ではなく
窓の外を見ていた
葉子はどちらかというと真面目(まじめ)な方で
授業中に余所(よそみ)見などするような奴(やつ)ではない
何かあったのだろうか

それに孝司の言っていた話を聞こうにも次の授業は移動教室で
移動する際(さい)に葉子は女友達に囲まれていて
近づきにくかったのだ、なので放課後に聞くことにした

「おーい葉子」

「あら、ちゃんと午後の授業に来たのね」

「同じクラスにいるんだから気づけよ」

俺は少し呆(あき)れながら言う

「いることよりも、いない事の方が多い人なんていても気づかないと思うわ
つまり存在感が薄いって事」

顔をフイっとそらしていいながら葉子(ようこ)は鞄(かばん)の中に箱のような物を入れていた

それになんだか酷(ひど)い言いようであるが昼に遅れたせいだろうか

「それより、話って何だよ?」

「その話はもういいのよ、もう昼に終わってしまったわ」

「じゃあわざわざ孝司に呼びに来させなくてもいいじゃないか」

「孝司君じゃないとダメなのよ私は色々といけない事情があるの」

「なんだよそのいけない事情って？
ただ呼びに行くのが面倒(めんどう)くさいだけだったんじゃないのか？」

「私が面倒くさいだけで孝司君に頼むと思うの？」

思いっきりその印象しかでてこないのはなぜなんだろう

「何その疑(うたが)いの表情は？もう仕方ないわねそんなに疑うなら
軽く事情とやらを教えてあげる」

葉子は、はぁっとため息をついていくつか質問してきた

「じゃあ今日の昼に図書室にいたのは誰？」

「俺と孝司(こうじ)と後輩の景山(かげやま)さんだけど」

「そう正確にはあなたと景山さんね。だから私がいけなかったのわかった？」

余計に意味がわからなかった

景山さんと葉子は別に仲が悪いわけじゃないむしろいい方だ

前にいじめられている所を葉子が助けたこともあるらしい

それとも最近に喧嘩(けんか)でもしたんだろうか

「何か景山さんと喧嘩でもしたのか葉子？」

「別に喧嘩なんてしてないわ忍ちゃんとはとても仲良しよ」

余計にますますわからなくなってしまった

「鈍い人・・・」

そういい残して葉子はさっさと教室から出て行ってしまった

## 鈍い奴（後書き）

相変わらず文才なくて困っている作者です
今回はもっと話があったんですけど
なぜか書いてるとき半分以上消えてしまって
書き直すはめになりました
保存はこまめにしましょうってことですね

## 異変

結局、葉子(ようこ)が昼に行っていた話は聞けずじまいで終わってしまった。
葉子が来れない理由も気になったが、また今度本人に聞けばいいだろう。
そこでその話については考えるのはやめにして教室をを出ることにした

「雨か・・・」

今日は確か天気予報で晴(は)れマークで雨は降らないと思っていたから
傘(かさ)は持ってきていなかった
ずぶ濡(ぬ)れて帰るのもあれなので
近くの置き傘を借りる事にした
もちろんその傘の持ち主はずぶ濡れになるだろう事は言うまでもない
校門の方に向かうとこの天気にも関わらず人が溜まっている
人の集まりの中に見知った顔を見つけた

・・・孝司(こうじ)だ

「孝司！」

「なんだ雅人(まさと)か」

「こんなところで何やってるんだよ？」

「いや、俺もこの雨で部活が中止になって帰ろうと思ったんだが、何故(なぜ)か外に出れないらしい」

孝司が冗談(じょうだん)を言ってるのかと思い

校門の方を見てみると何人かの生徒が出ようとしている

その光景をどこかで見た事があるパントマイムだっけか

それに似ている気がした

「本当だな・・・何か見えない壁か何かで通れないみたいだ」

「ついでにいうと裏門もダメな上に、誰かと連絡をしようと思ったんだが電話も
繋がらないらしい、こうなってしまうと漫画(マンガ)で言う何かの事件に巻き込まれたって展開だな」

苦笑(にがわら)いしながら言う孝司と同じ気持ちだったが

もしこれが漫画でいう展開だったとしても事件に合うのはごめんだ

どうにかして出ようと思ったその時だった

不意に携帯にメールが入った。それと同時に他の生徒も着信音が鳴ったりしている

それにしても誰からだろう・・・？

『体育館に集まれ』

差出人(さしだしにん)は不明(ふめい)でただそう書いてあった

「雅人、メールは葉子ちゃんからか？」

「残念だが葉子じゃない、名無しのごんべえさんからみたいだ」

横から覗き見る孝司

「内容は俺に来たメールと一緒だな、他の奴らも体育館に向かっているみたいだし
俺たちもいってみるか？」

「そうだな、とりあえず向かってみるか」

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4312e/

---

ジョーカー

2010年12月27日22時04分発行